

小学1年生の交通事故リスクについて ～子どもの交通事故防止のために保護者ができること～

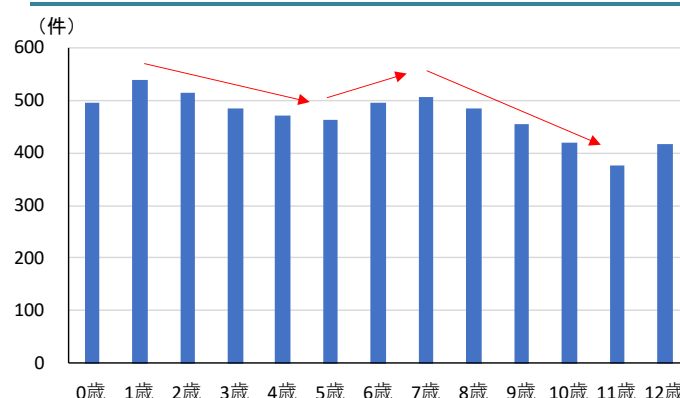
2022年3月25日

1. はじめに

4月は新学期・入学のシーズンです。保護者の皆様はお子さんの入学のために多くの準備をしていると思います。小学校入学を境に子どもの交通事故発生リスクは高まるため、お子さんと一緒に周囲にどのような危険があるか、事前に確認することが大切です。

防げたはずの事故に遭わせないために保護者ができることは何か、みていきましょう。

年齢別・人口10万人あたり件数（12歳以下）



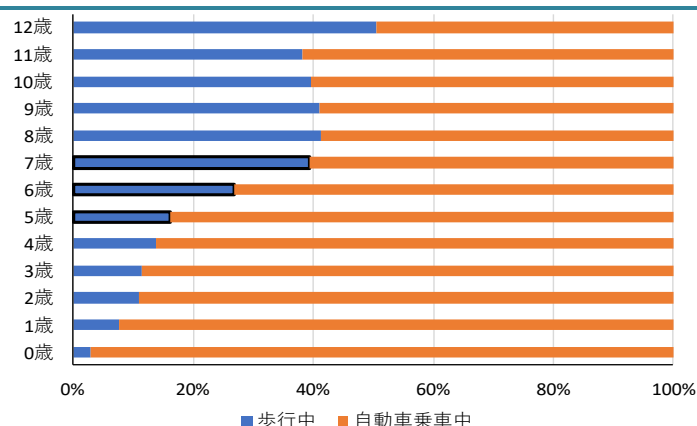
（出典）：当機構が集計したデータ（自賠責保険・共済からの支払件数。2020年度）と
総務省統計局「人口推計」¹（2020年10月1日現在）をもとに当機構で作成

2. 子どもの交通事故の現状

それでは、6～7歳の子どもは、どのような事故に遭っているのでしょうか。

年齢別に被害者の状態別件数の割合をみると、「歩行中」の事故の割合が大きく増加していることがわかります。

年齢別・被害者の状態別件数割合（2020年度統計・12歳以下）²



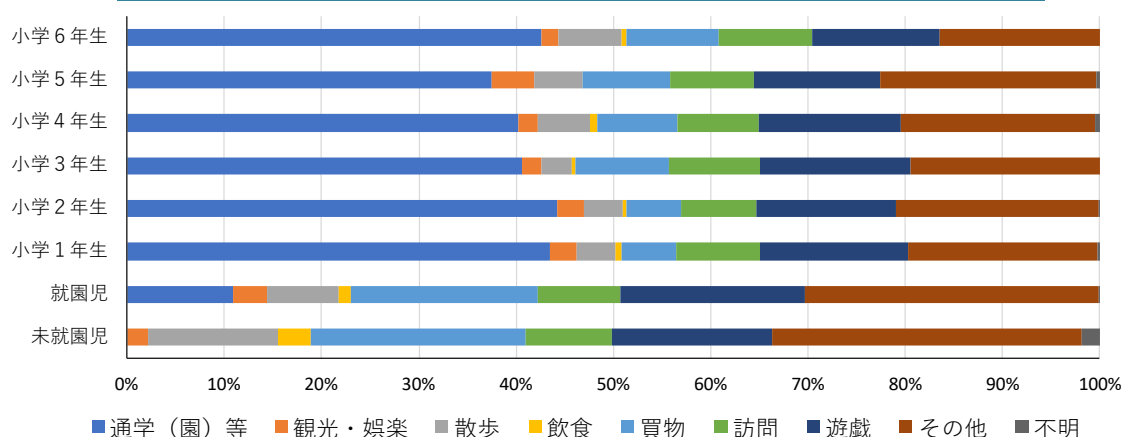
（出典）当機構が集計したデータ（自賠責保険・共済からの支払件数）

¹ 総務省統計局「人口推計」<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200524&tstat=000000090001&cycle=7&year=20200&month=0&tclass1=000001011679>

² このグラフでは被害者の状態が「歩行中（自転車等乗車中を含む。）」と「自動車乗車中」の2つの事故形態を取り上げています。

次に、歩行中の事故に関し、通行目的別に死傷者数をみていきましょう。小学1年生から「通学（園）等」の割合が急激に増加し、死傷者数の約4割が登下校中の事故に遭っていることがわかります。

学齢別歩行者の通行目的別死傷者数の割合（2020年、歩行中）



（出典）：交通事故総合分析センター『令和2年版 交通統計』をもとに当機構で作成

また、自宅から事故発生地までの距離をみると、小学生は死傷者数の約8割が自宅から1km以内で事故に遭っています。

学齢別の自宅からの距離1km以内の歩行中事故による死傷者数の割合（2020年）

未就園児	就園児	小学1年生	小学2年生	小学3年生	小学4年生	小学5年生	小学6年生
67.5%	67.3%	84.0%	81.2%	80.3%	82.7%	79.7%	79.6%

（出典）：交通事故総合分析センター『令和2年版 交通統計』をもとに当機構で作成

3. 子どもの交通事故防止のために保護者ができること

小学生は登下校中や自宅に近い場所で事故に遭っています。小学校の入学までに交通ルールを教えること、通学路などの身の回りの危険に気づかせ、安全に過ごすための行動を教えることが大切です。

（1）交通ルールを教えましょう

子どもの歩行中の事故の多くは、横断中に発生しています³。道路の横断の仕方を教育しましょう（警察庁「子供の交通事故防止対策の要点」⁴による。）。

①「横断歩道」、「歩道橋」、「信号機」の利用

→近くにあるときは、そこまで行って横断

②横断の意思表示と安全確認

→「立ち止まる」、「右左をよく見る」、「手を上げて横断することを車に明確に伝える」「車が止まっていることを確認する」、「信号が青でも必ず確認する」

③横断中も右左をよく見る

³ 政府広報オンライン「小学1年生の歩行中の死者・重傷者は6年生の約3.7倍！ 新1年生を交通事故から守るには？」

<https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201804/1.html>

⁴ 警察庁「子供の交通事故防止対策の要点」

<https://www.npa.go.jp/bureau/traffic/anzen/anzenundou/kodomonokoutuujikobousitaisakuyouten.pdf>

(2) 通学路・よく通る道路の危険な場所を一緒に確認しましょう

年齢が低いほど交通ルールを自分の行動につなげることは難しいです。通学路や自宅周辺の道路等で交通事故の発生リスクが高い場所を確認し、一緒に行って、なぜ危険なのか、事故に遭う行動はなにかを具体的に教えましょう。

また、子どもの目線が低く、視野も大きく異なることに注意しましょう。大人の目線では気づく危険を子どもは気づけないので、子どもの目線に立って危険を確認しましょう。

(3) 保護者自身も交通ルールを再確認し、遵守しましょう

子どもは一番近くにいる大人である保護者の行動を信頼し、真似します。保護者の目がないときも、子どもが交通ルールを守るよう、保護者自身も改めてルールを確認し、遵守しましょう。

子どもの成長とともに保護者が常に子どもを見守ることは難しくなっていきます。防げる事故に遭わないよう、普段の会話から子どもがどのような行動を取っているのか知り、それをポイントにしつつ身の回りの危険について日常的に話す、一緒に確認する機会を設けましょう。

また、万が一の事故に対し、経済的な損失に備えるための手段として、損害保険に加入しておくことは有効な手段の一つです。子ども自身のケガに対しては、傷害保険や自転車保険などで補償されます。学校などで保険に加入している場合もありますので、加入状況や補償内容を確認してみるのもよいでしょう。

以 上